

私の薦める本 「水の知 -自然と人と社会をめぐる14の視点-

沖大幹監修
東京大学「水の知」(サントリー)編

本書は、東京大学とサントリーホールディング株式会社によって、2008年に設立された総括寄付講座「水の知」を一冊の本に集約したものである。本のタイトルにもあるように、「水」をテーマに、国内外の問題とその解決に向けた提言を14名の執筆者が行っている。自然科学にとらわれず、社会科学、人文科学も交えた視点に立ち、「人」、「地域社会」、「世界」、「ビジネス」といったテーマから水にまつわる諸課題を最先端の研究を紹介しながら、平易に解説している。学術的な文献の多くが、非常に細分化された特定領域を題材とする中、「水」という大きなテーマを「トイレ」や「飲み水」といった生活に密着した視点に始まり、「河川管理」、「情報通信」などの技術的視点、政治問題を交えた「国際情勢」など多岐の視点から捉えている。その一方で、様々な分野、立場にある執筆者の提言が「水」という1つのテーマで繋がり体系立てられている点が非常に興味深い。

中でも、中山幹康氏による「水を巡る国家間の確執と強調」で示されている水資源の開発に伴う国際紛争の危険性の指摘や水に係わる国際協調の課題の指摘は、とかく自身の専門分野にばかりに目が向きがちになる研究者に対し、専門性と同時に常にグローバルな視点を持ち続けることの重要性を再認識させるものであり、非常に示唆に富む。

また、溝口勝氏による「農地は水のコントロールが命-農地情報リアルタイムモニタリングシステム-」では、凍土の研究から、土壌流亡対策、農業用水、農業水利施設の管理の問題を情報通信技術(ICT)の利用の可能性を踏まえつつ解説している。土粒子→土→農地→地域と話題の対象領域を徐々に広げながら論を展開する中で、「水」「土」「施設」「地域」といった農業農村工学の諸分野が1つの体系だったものであることを気付かせてくれる。中でも、耕作放棄地に係わる問題指摘では、農地とそれを結ぶ農業用水路を血管に例え、その維持管理を地域ぐるみで行いつつ、ICTを利用した農地モニタリング技術の導入による省力化・効率化を提唱している点が興味深い。特に、「情報」「農地」「施設」といった小さな垣根にこだわらず、適正な農地管理の実践に、周辺の農業水利施設のストックマネージメントをも含めた、地域を総合的に見る視点の重要性を唱えている点が、非常に示唆に富んでいる。また、ICTの利用を掲げつつ、「地域の力」の重要性をとらえている点は、農業農村工学の今後の1つ

の方向性を示すものといえる。

かく言う私は、現在、大学では水利造構学分野を担当しながら、青森のリンゴ園地で農家と協働の園地モニタリング実験を進めている。一見、関連性の薄そうな分野を横断的に扱っているため、自身の立ち位置が不鮮明になりがちだった中、「ICTの利用」「園地管理」「ストックマネージメント」を総合的に捉えた氏の提言は、今後の自身の研究を進めるうえでの「道標」を得た感である。



体裁：B6版 284ページ
発行：(株)化学同人
発行年：2010年4月10日

著者の裏話：

水をめぐる学問は農学・工学・理学・人文社会学などそれぞれの分野で個々に扱われることが多かった。こうした状況を打開しようと、2005年に若手教員が分野横断的な「東大水フォーラム」を立ち上げ、学生を巻き込みながら研究集会や現地調査合宿を行うなど、分野間の壁を取り払う努力をしてきた。2009年夏学期には東京大学教養学部(駒場)で全学自由研究ゼミナール「水の知最前線『水で生きる』」を実施した。本書はこの講義録を再構成したものである。

農学分野から参加していた私は、合宿や講義で最新の研究を紹介しながら、浅学を省みず意識的に土地改良区や農業用水に関連付けた農地管理の重要性を話すようにした。それが第3章の内容である。実際の出版内容については監修者の沖氏と何度も議論した。氏が一番食いついてきたのは「なぜ霜柱の上に土粒が載っているのか」の話だった。メール上で凍上や霜柱成長のメカニズムを何度も説明したが、結局はわかってもらえなかった。それはそれで残念であるが、氏は土壌水の奥深さを認識したようで、まえがきの3章に対する紹介に「また、霜柱は上に土粒子がないと発達しない、という物理的メカニズムもおもしろいのではないのでしょうか」とコメントしている。改めて霜柱に関連した解説を書かねばならないと思ったが、私には、「水の知」よりも「水土の知」の方が守備範囲が広いことを再認識できた出来事でもあった。

弘前大学 加藤幸/東京大学 溝口勝